

歴史散策

木曾三川水郷の旅 輪中文化にふれる



船頭平閘門

【日時】 11月16日(日) 8:30~12:30

【コース】 (集合・受付・出発) 桑名駅(東口)
(解散) 住吉浦棧橋

桑名駅・出発

- ① 海蔵寺 ⇒ ② 住吉浦棧橋(乗船) ~ ~
③ 長良川河口堰 ~ ~ ④ 船頭平閘門 ~ ~
⑤ 船頭平棧橋(下船) ⇒ ⑥ 木曾川文庫【講演】 ⇒
⑦ 船頭平公園散策 ~ ~ ⑧ 船頭平棧橋(乗船) ~ ~
⑨ 長良川河口堰 ~ ~ ⑩ 住吉浦棧橋(下船)・解散

【案内人】 1班：田中 浄 (桑名歴史案内人の会)

2班：加藤 重樹 (桑名歴史案内人の会)

主催： 三重県

後援： 桑名市、桑名市教育委員会

協力： 桑名歴史案内人の会、「美し国おこし・三重」実行委員会

事務局

〒511-8567 桑名市中央町5丁目71番地

三重県桑名地域防災総合事務所 歴史散策係(地域防災課)

電話：0594-24-3821

東海道は、古代より都と東国を結ぶ街道であり、鎌倉時代には、鎌倉と京都を結ぶ最も重要な幹線道路となった。このころには、街道沿いに専門の宿屋を主体とした宿と呼ばれる集落が現れていたと言われる。そののち、天下を掌握した徳川家康により中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中とともに五街道の一つとして一里塚や宿場、伝馬制度が整備された。これらは、江戸の品川宿を第一の宿とし、京都の大津宿まで五十三の宿場がもうけられたことから、俗に東海道五十三次と呼ばれる。

東海道の総延長は、江戸日本橋から京都三条大橋間の約 125 里（約 500 キロメートル）。昔の旅人は、夜明け前に宿を立ち、夕暮れ頃まで歩いて、500 キロメートルの道のりを 12～15 日で歩いたという。一日平均では約十里（39 キロメートル）。現代人に比べてずいぶんと健脚だが、これは、宿賃が高いためゆっくり旅をしていたのでは、旅費がかさんでしまうからだという。

三重県内を通る東海道は約 45 キロメートル。尾張宮宿から海上七里を渡って、東海道 42 番目の宿・桑名宿にはいり、四日市宿、石薬師宿、庄野宿、亀山宿、関宿、坂下宿を経て天下の難所であった鈴鹿峠へと向かう。

今回は、桑名駅を出発し「薩摩義士の墓」がある海蔵寺を見学後、住吉乗船場から船に乗って、長良川河口堰、船頭平閘門の「小パナマ運河」を通過体験する。

◆ かいぞうじ 海蔵寺

ほうしやうざん

法性山と号す。曹洞宗。古くは西方村にあったともいう。

寛永年間(1624～1644)に中興。宝暦治水工事の際に亡くなった

「薩摩義士 24 基の墓」がある。中央の五輪塔が工事の総奉行

をつとめた薩摩藩家老平田鞆負ひらたのぶきえ(宝暦 5 年=1755 没)の墓である。

本堂等の建物は戦災で全焼。現本堂は昭和 31 年(1956)再建。

寺宝として平田鞆負木像(昭和 3 年、内藤伸作)、義士を葬った

際の「葬い証文」、薩摩焼焼酎徳利などがある。平田鞆負の命

日である 5 月 25 日には毎年祭典供養が行われる。



◆ みさきみつけあと あいおいらう 三崎見附跡（相生町）

江戸時代、三崎通は、美濃～多度への往来で「番所」と「三崎御門」が設置されていた。また、人の往来が多いので、寺の開帳や芝居・相撲の開催などを告げる立札が立てられた。

三崎は、御崎・岬などとも書かれるように、昔は海に突き出た陸地だった。古代には、現在の桑名駅より東一帯は 3 つの洲に分かれており、「三崎」は、その洲の一つ「自疑洲崎」の総称だった。江戸時代の初め、初代藩主本多忠勝によって三洲は統合されて町割りが行われ現在の街並みとなった。

「見附」とは櫓があり番兵を置いた門のことをいい、城門を意味し、門は枡形が一般的だった。



◆ 七里の渡し跡

慶長6年(1601)正月、江戸と京都を結ぶ東海道が制定され、桑名宿と宮宿(現名古屋市熱田区)の間は、海路7里の渡船と定められた。のち佐屋宿(現愛知県愛西市)へ川路3里の渡船も行われた。宮までの所要時間は3~4時間と思われるが、潮の干満によりコースは違っており、時間も一定ではなかった。ここは伊勢国の東入口にあたるため、天明年間(1781~1789)に、「伊勢国一の鳥居」が建てられ、昭和5年以来伊勢神宮の遷宮ごとに伊勢神宮の宇治橋入口の鳥居を移して建て替えられている。

明治になって、東海道制度は廃止となったが、揖斐川上流の大垣との間に客船や荷物船の発着場となっていた。昭和34年(1959)の伊勢湾台風以後の高潮対策工事のため、渡船場と道路の間に防波堤が築かれて旧観は著しく変化し港としての機能は全く失われた。昭和63年から平成元年にかけて、付近の整備修景工事が行われた。

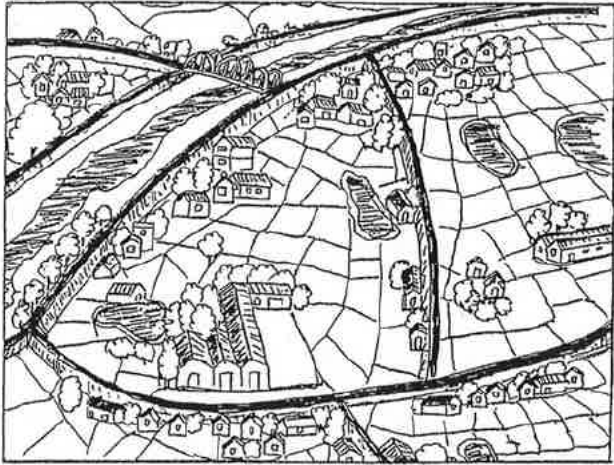
平成19年に周辺整備が行われ、現在の景観となった。なお、現存する常夜灯は江戸や桑名の人たちの寄進によって建立され、元は鍛冶町の東海道筋にあったが、交通の邪魔になるので、ここへ移築された。元は天保4年(1833)建立のものであったが、昭和37年に台風で倒壊したので、台石は元のままであるが、上部は多度神社から移したもので、安政3年(1856)銘。



出典 志るべ石(桑名市教育委員会)
桑名ふるさと検定 桑名のいろは(桑名ふるさと検定実行委員会)
みえ歴史街道ウォーキングマップ東海道(三重県環境生活部)

※ 資料に使用しました画像・文章につきましては、すべて制作者の承諾を受けております。

「輪中」ってなに？



長島町は、木曾三川（揖斐川・長良川・木曾川）に囲まれた、文字どおり長い島の町です。でも、長島町も昔から一つの大きな島ではありませんでした。いくつかの島があり、七つの島で“なな島”となり、“なが島”となったともいわれています。

でも、長島という島はちょっとちがった島。水面より低い島、まわりを堤防にかこまれた輪中とよばれる島なのです。

★輪中のうつり変わり

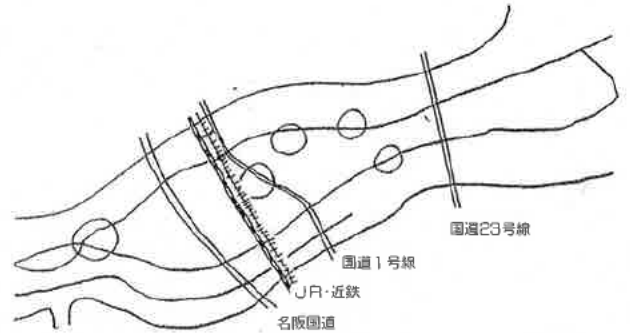
小さな輪中がとなりの輪中といっしょになって新しく大きな輪中にするために、必要でなくなった部分の堤防を取って新しい堤防の土のりに使ったりして、なくなってしまったところもあります。

また、交通の発達によって堤防がじゃまになり、低くしたところもあります。

長島の輪中は、明治の大改修でほぼ今の形ができ上り、昭和34年の伊勢湾台風でも堤防がたくさん切れたので、強くするためにコンクリート化されたり、地盤沈下がひどくなったためのかさ上げ工事などが行なわれて、今では近代的な輪中ができ上がっています。

★旧輪中堤防は今でもあります。

長島町内には、むかしの輪中をしのぶ旧輪中堤防が今でも残っていて、見ることができます。



○ 旧輪中堤防のわかりやすいところ

鎌倉時代のころ



江戸時代末期



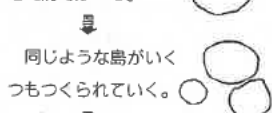
長島の土地は、木曾三川が伊勢湾に注ぐ所に上流から運ばれてきた土砂がたまり、土地の隆起と共に来た平地を、その上流の部分からしだいに一つずつ堤防で囲みながら開拓されていったようです。

1185年、1223年の古い文書に、松之木や坂手などができているので、この頃から今の長島の原形ができてきたようです。

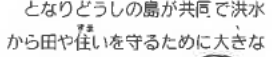
1600年代には、新田の開発が盛んになり、だんだん川下の万へ田畑がのびていきましたが、洪水で流されたりして、苦労がたえませんでした。

輪中のでき方 ①

川下の三角州の小高い所に人が住みつき、まわりを堤防でかこむ。



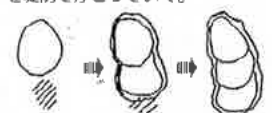
同じような島がいくつもつくられていく。



となりどうしの島が共同で洪水から田や住いを守るために大きな輪中堤防でかこんだりして、しだいに大きな輪中になっていった。

輪中のでき方 ②

田をふやすため、輪中の川下に他から砂を盛り上げ、さらにそれを堤防でかこっていく。



開拓をしょうれいする政策とも重なって、各輪中が競って新田開発に努め、大きな輪中になっていった。

木曾三川の大改修は

低い土地を堤防でかこってできている輪中は、何度かの洪水で荒れたり消えたりしながら、そこに住む人達は大へんな苦労でした。そのため、木曾三川の治水に大きな改修工事が何度も行なわれました。

① 宝暦治水(1753~)

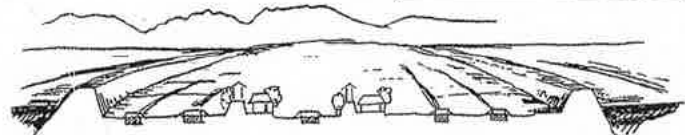
江戸時代、木曾川左岸に御園堤がつくられて合流部分の災害がはげしくなったので、江戸幕府は、薩摩藩に三川分流工事をさせ、総工費40万両、割腹者51名を出した大工事で、今、千本松原の堤防として、当時の工事のあとをみることができます。

② 明治の大改修(1887~1912)

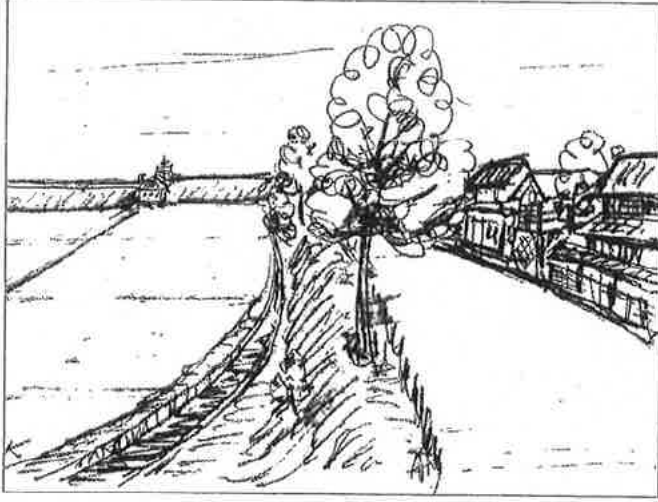
明治政府のたのみで、オランダ人技師デレーケなどが木曾三川を調査、いろいろな提案をうけて、明治20年から24年間4期の工事に着手しました。

- ① 木曾三川の完全分流
- ② 小河川をまとめ、輪中の再編成
- ③ 船頭平に閘門を設ける

などで、水害が減少するとともに、つぶれた土地よりも新しくつくられた土地の方が多く田がふえて、安定した治水の第一歩をふみ出しました。



「輪中堤」ってなに



木曾三川の川口にできた三角州は、大部分が砂とドロでできています。川口の高いところに田や畑、住む所にするためにまわりを囲ってできたのが輪中ですね。

この輪中のまわりにつくられた堤防を「輪中堤」といいますが、ただまわりの砂を高くすればくれるものではありませんでした。どのような工夫がされていたのでしょうか。

● 木曾三川下流にたくさんの輪中ができ、さらに下流の新田開発が進んでくると、いろいろな問題がでてきました。

- (1) 上流の輪中では河川の水の流通が悪くなる。
- (2) 水の流通が悪くなると、上から流れてくる土砂が川床にたまって川床が高くなり、河川の天井化がはじまる。
- (3) 輪中内では、深水、長期湛水現象がでてくる。
- (4) 排水悪化によって、稲作に支障をきたす。

輪中堤の強化によって、外水（洪水入水）の危険はへっても、輪中内にたまった（内水）の災害が問題化してきました。長島では、慶応年間から明治にかけて、長期湛水、深水による凶作が記録されています。

● このため、農民は、自衛のための工夫として「切上げ堀」「重ね田」「畝田」などの対策を考えて工夫しました。これらは、輪中農業の特長として、土地改良事業が始まる昭和30年代まで、一般的な農業形態でした。

● 一方、政府や市町村も排水問題を課題として取り組み、輪中に水利組合がつけられ、排水機が順に設置されていきました。

※表紙は、今なお残る旧輪中堤です。

中部地方の“母なる川”木曾三川は、日本一広いデルタ地帯をうるおしています。しかし、この広大なデルタは、同時に日本一広い海拔ゼロメートル地帯でもあります。

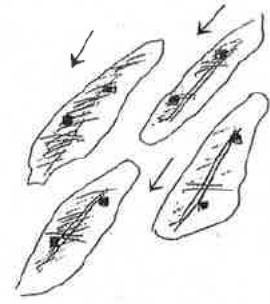
大昔から洪水や高潮の荒れ狂う舞台でもあったこの地方に、人々はどのようにして、住みつき、田畑をつくっていったのか、今に残る輪中堤の歴史から調べてみましょう。

輪中堤のうつきわりー

① 自然堤

木曾三川の合流する低湿地帯は、洪水のたびに一面海のように水でおおわれました。しかし、その洪水によって上から多量の土砂が運ばれ、ふだんの川岸のところにたまりました。

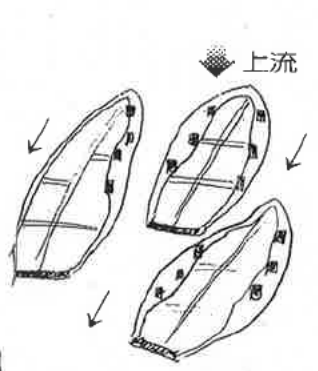
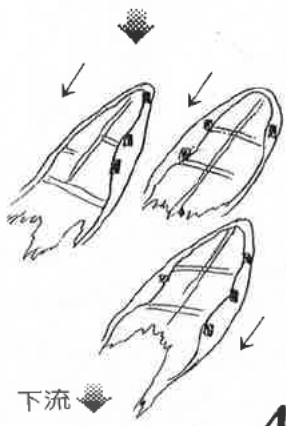
人々は、この川岸にたまった土砂の小高い所に住み、高畑をつくり、村をつくっていききました。



② 尻無堤 (又は築捨堤)

自然の堤防だけでは、洪水などの上流からの冠水から守ることができないので、人々は自然堤防をつないで上流をしめ切る堤防をつくりました。A型の堤防で、これに囲まれた水田は“流作場”といわれました。

しかし、下流がシリ無しだったので、出水の時は、下流から水が浸入する悩みがありました。

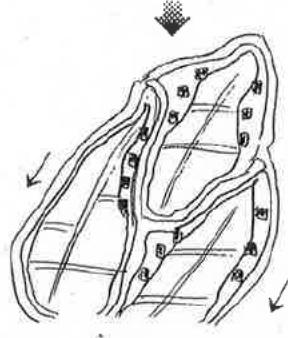


③ 潮(塩)除堤

尻無堤に囲まれた水田は、洪水や下流の海水の浸入にも悩まされました。

そこで、人々は、海水の逆流を除くためにシリ無しの部分に堤防をつくりました。

この堤によって堤防で囲まれるようになり、今の輪中のもとができあがっていったのです。



④ 懸回堤

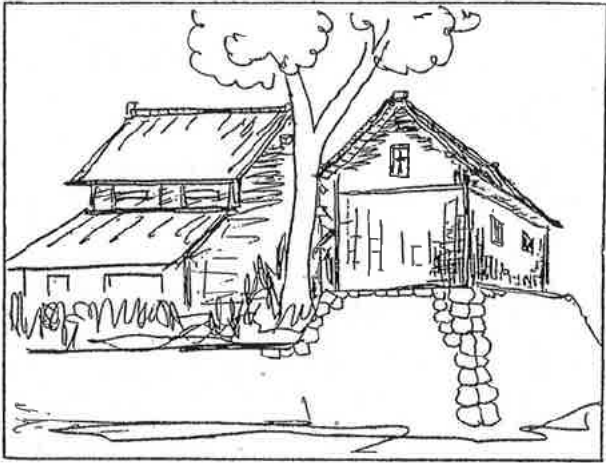
江戸時代になると、新田開発も盛んとなり、いくつかの小さな輪中をとり囲んで大きな堤防をつくり、小さな輪中が合わさって大きな輪中になっていきました。もとの輪中の堤は中堤として残りました。

水を防ぐだけでなく、敵を防ぐ役目もあって、17世紀頃から築城に関係した“曲輪の内”つまり輪の内、輪中と呼ぶようになりました。

その後の輪中堤は...

- 木曾三川下流の輪中は、たびたびの改修で形を変えていきました。
- いくつかの輪中をひとまとめにして、周りをより丈夫な堤防でこい強力な排水機をつくって、台風や洪水から全体を守る努力が続けられています。
- 輪中の中にあつた堤防“中堤”は、そのまま現在まで残されている所もあり、また自動車などの交通上不便であると考えて失くしたところもあります。しかし、伊勢湾台風では、この中堤が洪水の力を弱める大切な働きもしました。

「水屋」ってなに?



木曾三川（揖斐川・長良川・木曾川）の川口にできている長島町には今でも「水屋」とよばれるたて物がたくさん見られます。

この「水屋」は、なぜか北西の、しかも、母屋より高いところにたてられています。それに、竹やぶや石垣でがんじょうにかためられています。

なぜ、「水屋」がこの長島に多く見られるのでしょうか。

★なぜ水屋が多いのでしょうか。

長島町などの、堤防でかこまれた輪中とよばれるところでは、住んでいるところが川や海の水面より低いいため、堤防が切れたら水につかってしまいます。そのため、食料や衣類などを水から守るために、母屋の軒の高さまで土台を高くした水屋を建ててそこに保存したものです。

★水屋はこの家にもあったのでしょうか。

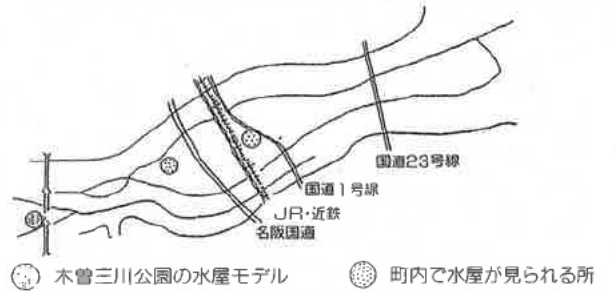
どこの家にもあったわけではありません。低い土地に土を高くもり上げるにはたいへんなお金が必要です。土もりと水屋を建てる費用を合わせると、とてもふつうの家では作ることができませんでした。まして、石垣の石まで手に入れられる家はまれでした。

今見かける水屋は大部分石垣づくりですが、そのほとんどは後で石垣につみかえたものです。

★水屋をくわしく見たい人は……

長島町の北部に多く見られます。(中川地区、西川地区)

内部までよく見たい人は、油島(千本松原の北のはし)にある、木曾三川公園にモデルが作られていて、自由に見ることができます。



場所
冬の風をしのぎひざしをさえぎらないところ。

舟
連絡やうんぱん用の舟です。水屋の中につるしたり、軒下につるしたりします。

舟つなぎの木
水屋には、たいい舟をつなぐ大木が1本あります。

はしご
2階(つし)へ上るためのもので場所をとらないように、たいへん急なはしごになっています。

ふとんなど
高価な衣類やふとんなどが2階(つし)に上げてあります。

みの・かっぱなどの雨具
大雨や洪水のとき着るみのやかさなどが家族の数だけそろえてあります。

水屋の中は…

たんす
家族みんなの衣類が入れてあります。木綿の仕事着などが入っています。

みそ・うめぼしなど
長く水につかったときに耐えられるよう、みそ、しょうゆ、つけものなどの保存食料がじゅんびされています。

母屋と水屋をつなぐ急な階段で、屋根つきのものもあります。

土もり

① やや高いだいのところは
土をしめて高くしてあります。

② 高くすると、水に洗われやすい
ため、土もり部分に竹を植えて根をはらせて丈夫にしました。

③ さらにゆりのある家では、石垣をつみ上げて
がんじょうにしました。

① 米倉式水屋
米を保存しておくのが中心です。

② 居住兼用水屋
居室、米倉、味噌部屋、土間がある。

③ 水屋式住居
家全体を水屋と同じ高さにしたものです。

「宝暦治水」ってなに?



木曾三川の川口に位置する市町村の人たちにとって、本格的な三川の治水の始まりであり、難工事でたくさんの犠牲者を出した工事でもあった宝暦治水は、忘れてならない大工事でした。

今、千本松原としてきれいな松並木になっていますが、どのように作られ、そのおかげでどうなったのかをさぐってみましょう。

★治水神社（油島の南、千本松原のはじまる所）

治水神社は、宝暦治水の完成に力を尽くしながら自刃していった平田靱負を祭神にして昭和13年5月油島しめ切り堤防に建てられた神社です。昭和28年に、当時の犠牲者83名の治水観音入佛式も行なわれました。

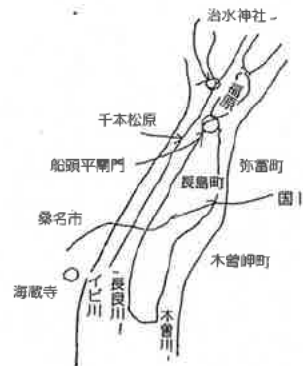
薩摩藩士がふるさとを遠く離れた異郷で洪水とたたかい幕府のいやがらせにたえて工事を完成させた偉業をたたえて、四季を問わず多くの人々が訪れています。

★薩摩義士墓所（桑名市八間通り海蔵寺）

宝暦治水工事で自刃したり病死した薩摩藩士は、幕府の手前、埋葬にも苦労したと伝えられています。

珍龍和尚のはからいで、桑名市の海蔵寺には、平田靱負以下23名が埋葬されていて、人の訪れもたえません。

この地で果てた他の人々も、流域の各寺に分散して埋葬されています。



木曾三川の治水工事のはじまりは

豊臣秀吉の時代に木曾川の尾張側(東岸)の堤防がつくられ、1810年頃、徳川義直によって、犬山から弥富までの48kmもの堤防がつくられました。

この堤防は、尾張藩をかこむ形となって治水のためだけでなく、西の大名の侵入にそなえるためでもあり、「御廻堤」と呼ばれていました。

美濃地方の堤防の補強は、尾張藩のきびしい条件にしばられて思うようにできず、輪中地帯は、洪水のたびに水害に苦しめられてきました。

宝暦3年(1753)の大洪水のあとで

徳川幕府は、宝暦3年の大洪水のあと、水害に苦しむ人々の声をきいて、井沢という人の考えた三河分流計画をもとにし、木曾三川分流工事を行うことにしました。

幕府は、この木曾三川の治水工事を薩摩藩(鹿児島県)に命じました。そのわけは、西の大名のトップである薩摩藩の勢力を弱めるという目的があったからです。

薩摩藩では、相談の結果、1754年2月平田靱負を総奉行として、この難工事に着手しました。さて、その工事は……



予想をこえた大工事

薩摩藩から出した人数は、家老以1,947名これに土地の工夫などを加えると、2,100人にもなって、その費用は、当時のお金40万両今なら何千億円にもなるような大工事となってしまいました。どんな工事だったでしょう。

薩摩藩士の命、今もなお…

この治水工事は、幕府の役人もほめ、諸國からたくさんの人が見学に来たほどです。

また、この油島のしめ切り堤の上に薩摩藩士が苦しかった工事の思いをこめて、千本の「日向松」の苗を植えたといわれ、今千本松原の松並木として、私たちに語りかけています。

たくさんのぎせいの上に完成

薩摩藩士は、工事中に51人が腹を切り、32人が病死。総奉行は、多くの藩士をなくし、借金の責任をかんじて、自刃。

1755年(宝暦3年)3月、工事が完成し、5月に幕府の検分も終わりました。

工事が困難をさわめたわけは

- ①幕府の方針で工事の計画がたびたび変更されたこと。
- ②大雨によって手もどりがおきたり、資材も流失したこと など

三大難工事といわれた工事は、

- ①油島のしめ切り工事
- ②大橋川洗いぜき工事
- ③逆川洗いぜきしめ切り工事

工事にかかった資材

木材 12万743本
御材木 5,816本

粗朶(もだて) 700束
唐竹(からたけ) 172万8708本

石材 4万1724坪
砂利・土 20万3403坪

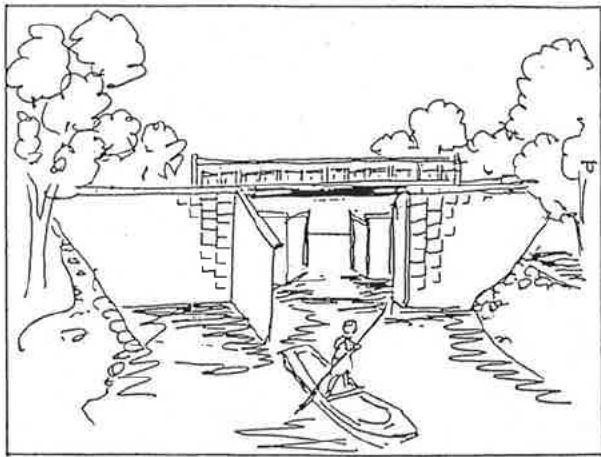
厩 1万501房
空俵 18万2870俵
縄 5万5404房

工事費 40万両

米 160万俵

「三川分流」ってなに?

さんせんぶんりゅう



宝暦治水とともに、木曾三川の治水の歴史の中で大きな工事となったものに、明治の木曾三川分流工事があります。しかも、この大工事には、オランダのかんがい技師 ヨハネス・デレーケ達の名も忘れてはなりません。

どうしてオランダの技師が来たのか、そして、三川分流工事はどのようにしてできたのでしょうか。

★デ・レーケはなぜ日本へ来たのでしょうか

明治の初め、日本政府は、日本の国土開発を指導してもらうために低い土地開発の先進地のオランダから技師を招くことにしました。

ドールンをキャップとして、エッセル、ムルデン、リンドウ、チッセン、デ・レーケの5人の技師と4人の工手の計10人のオランダ人技師団でした。

★デ・レーケって、どんな人?

1842年、オランダの海岸港湾建設業の息子として生まれ、青年時代に家業について土木工学を学び、アムステルダム運河組合へて、スヘリングワーデのオランダ閘門の主任工事監督もしました。工場現場たつきあげて、いっしょうけんめい仕事をする人でした。

★デ・レーケはどんなことをしたの?

デ・レーケが日本ではじめて行なった仕事は、淀川上流山地の砂防工事でした。次に、淀川、木曾三川、庄内川、吉野川、多磨川などの河川改修、長崎、博多、宇品、東京、横浜などの港湾計画もつくりました。

デ・レーケは、明治改修計画(木曾川下流改修)をつくり、今日の木曾三川のもとをつくったのです。

明治以前の木曾三川の治水は

木曾三川は、広くて肥えた濃尾平野に広がり、昔の木曾三川の流域は、三川が網のようになり、自然の堤防が発達し、その自然堤防に集落ができて、流域の人々は、低地に開田をすすめました。

今から1000年前頃には「水屋」もつくり、660年前頃には全体を囲う「輪中堤」もつくりられています。江戸時代には、木曾川左岸に徳川義直が堤防(御用堤)を築き、三川合流部ではかえって災害が激しくなりました。

幕府は、1753年(宝暦3年)に、この木曾三川分流工事を、西国の強い薩摩藩の弱体化を兼ねて命じました。総工事費40万両、腹を切った人51名、病気で死んだ人32名を出した「宝暦治水」です。

明治改修計画とは

デレーケは、1878年2月から3月にかけて木曾三川下流部を調査し、木曾三川のいろいろな問題を分析し、河川改修の構想を内務省に提出しました。

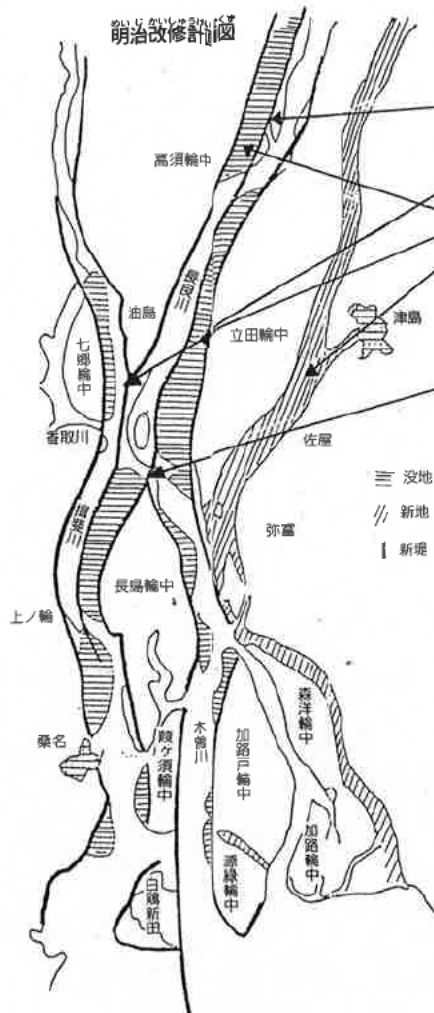
◎水害の原因は、

・木曾三川の土砂が河道をうめて、荷床が高くなり、堤内の排水ひ門が動かなくなっていること。

◎改善は、

・木曾川と長良川の間に背割堤を設け完全分流に。
・木曾川の流送土砂を防ぐために、草木の植えつけや山間の支流に砂防堤をつくる。

◎1886年、明治改修計画がつけられました。



明治改修の主な内容は、

- ①木曾三川を完全に分流する。
- ②佐屋川を廃川にする。(うめる)
- ③立田輪中に木曾川新川をつくる。
- ④長良川のわき川の犬瀬川、中村川、筆須川をしめ切る。
- ⑤高須輪中に長良川新川をつくる。
- ⑥油島洗ぜきは、完全にしめ切る。
- ⑦船頭平に閘門をつくる。
- ⑧木曾川、長良川の河口に導流堤をつくる。
- ⑨水門川、牧田川、津屋川の揖斐川への合流点を引きさげる。

明治改修の効果は

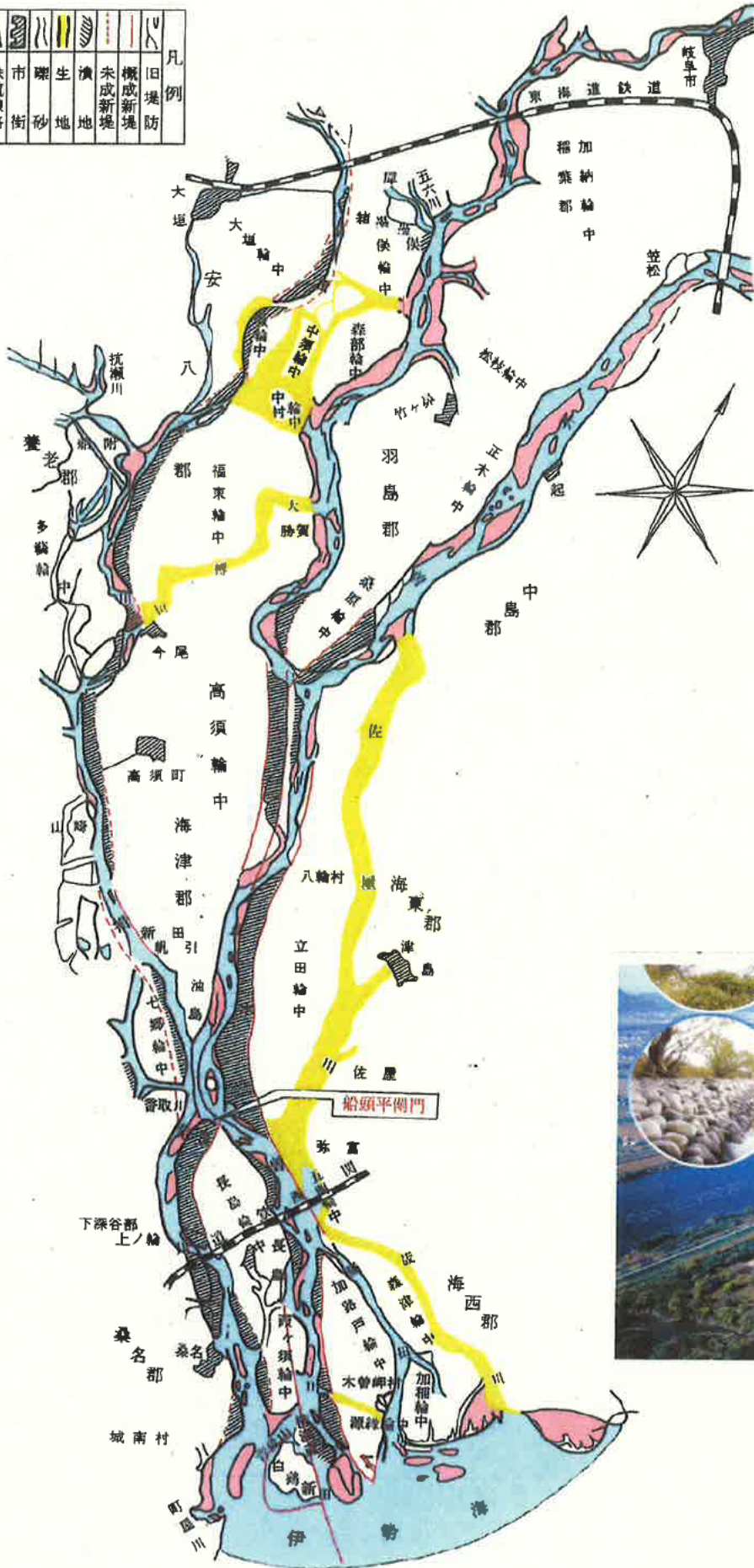
明治改修は、明治20年(1887)から24年間に4期に分けて行なわれ、総事業費は974万円をつかって完成しました。

明治改修の効果は、

- ①水害が大へん少なくなって、木曾三川流域の農業も改善されました。
- ②新しく耕地となった旧河川敷や堤敷は、24町歩あって、なくなった土地よりも相当増えました。
- ③全国の河川改修をすすめるチャンスとなり、明治からの近代的な治水工事のさきがけとなりました。

明治改修計画図

								凡例
鉄道線路	市街	川	生地	潰地	未成新堤	概成新堤	旧堤防	



●デ・レーケ
技師銅像

この銅像は、木曾三川治水百周年記念事業として、デ・レーケ技師ゆかりの地、船頭平河川公園（愛知県愛西市立田町）に多くの方々の募金により建立されました。

